

2023年7月2日

年間第13主日

菊地功大司教 メッセージ

マタイ福音は、「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」という、主イエスの言葉を記しています。「自分の十字架」とは一体なんでしょうか。苦行を耐え忍ぶことでしょうか。人生の諸々の苦難を背負ってしまうことでしょうか。

わたしたちにとって、十字架とはいったいなんでしょう。マタイ福音に記されたこの言葉は、主にふさわしいものとなるための条件としての十字架です。それは前向きな行動を促す言葉です。

パウロはローマの教会への手紙に、「わたしたちは洗礼によってキリストとともに葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられように、わたしたちも新しいいのちに生きるためなのです」と記しています。主御自身の死と復活をもたらしたその中心には、十字架が存在します。すなわち、わたしたちは、十字架を通じて主の死にあずかり、主とともに新しいいのちに生きるものとされます。十字架は、すべての人を救いへと招こうとされる、主の愛といつくしみを具体的にあかす、栄光と希望を指し示す存在です。

コリントの信徒への第一の手紙、一章十七節に、パウロはこう記します。

「キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしいものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです」

もちろん、救いのために洗礼が必要であることは否定できませんが、その前提としてまず大切なことがある。それはイエス・キリストの福音を告げることなのだと、パウロは宣言しています。

加えてパウロは、「しかも」と続け、福音を言葉の知恵に頼って告げていたのでは、キリストの十字架がむなしいものとなるということです。ここではじめて、パウロが語る十字架の意味が明らかになります。神ご自身による、具体的で目に見える愛のあかしが、十字架です。十字架は、人間の救いのために、神ご自身がその愛といつくしみをもって具体的に行動した愛のあかしそのものです。

十字架は、重荷や苦しみではなく、積極的な愛の行動の象徴です。わたしたちが神からよしとされるのは、神の愛といつくしみをいただいて、自らそれを積極的にあかしする行動を選択したときです。十字架をあかしするものとなりましょう。愛といつくしみを具体的な行動であかしし、すべての人に神の栄光と希望を伝えていきましょう。